NEWS LETTER
リーブラ
LIBRA No.61 2017.11
公益財団法人　東海ジェンダー研究所
TFGS THE TOKAI FOUNDATION FOR GENDER STUDIES

GRLの「気づき」の工夫

朝日新聞編集委員（政治担当）松下　秀雄

名古屋大学の東山キャンパスを訪ねると、いちばん賑やかな通り沿いに、その建物があった。11月1日に開館した「ジェンダー・リサーチ・ライブラリ」（GRL）だ。

旧帝国大学の図書館というと私の頭には、「権威」の臭いが漂う、いかめしいイメージが浮かぶ。けれど木立に囲まれ、三角の屋根が重なりあう造形は住宅っぽくて、やわらかな印象を受ける。

公益財団法人「東海ジェンダー研究所」が20年間の運営費と2万冊の蔵書を贈る（水田珠枝・名古屋経済大学名誉教授からの5千冊を含む）。講演会などに使うレクチャールームや、海外から訪れる研究者用の研究室も備え、ジェンダーをめぐる「知の拠点」をめざす。

玄関を入ると、正面の白壁一面に、青と赤のアルファベットが並んでいた。向かって左側の青い字は、1789年のフランス人権宣言。自由と平等、国民主権といったフランス革命の原則を示す、あの宣言だ。

だが、そこでいう人とは男性のことだった。だから女性劇作家オランプ・ドゥ・グージュは1791年、右側の赤字の文章、女性の人権宣言を記した。その10条は玄関ホールに加え、書架の上にも刻まれている。こんな意味だ。

女性は処刑台にのぼる権利と同様に、演壇にのぼる権利をもたなければならない――。

グージュは「反革命」の容疑を着せられ、処刑台にのぼらされた。そこまでの差別や迫害をみずに済む社会に生まれた幸運に、ほっと胸をなでおろす。

でも、いまはよい社会なのか。GRLの設計を手がけた環境デザイン機構の佐藤俊郎代表取締役は、こんなことを言っていた。

「女性たちは無理やり、男が造った建築や空間に住まわされています」

GRLは、女性研究者らがデザインの知恵を出し、若い女性が工事の現場監督を務めた。けれどこれは例外的で、日本の多くの建物や街の空間は男性主導で造られている。女性にフィットしているのだろうか。

私は、建築はど素人。だが政治記者として、男性主導でつくられる法や制度の不具合は感じる。女性や子どもの貧困も、非正社員の待遇の悪さも、婚外子差別も、働いてばかりで女性や子どもの現実に疎い男性たち、中でも恵まれた立場にいる人たちが、政治や行政を主導しているからではないのか、と。

とかなんとか、えらそうに言っているが、私もそのひとりである。男性で、正社員で、「本土」と呼ばれる地域に生まれ、障害もない。記者である以上、人の痛みや生きづらさに敏感でありたいと思いながらも、身にしみていない自分をもどかしく思う時がある。恵まれた属性は、記者としてはマイナスに働くのかもしれないと考えたりもする。

いまの差別や抑圧は、昔ほどあからさまではない。男らしさ、女らしさのような道徳や慣習、制度の中に埋め込まれたそれらに気づけるか。私自身の課題である。

GRLに戻れば、女性の人権宣言のほかにも「なんだ、これ？」と疑問をもち、気づくための工夫があちこちに施されている。トイレの前には、ひげを蓄えてスカートをはく人などのピクトグラムを配し、多様性を表す。カフェには男女の体のラインをかたどったイスを置く。違う性のイスに座り、違和感を覚えてもらおうという趣向だ。

そんな環境の下、違う属性や体験をもつ人たちと談論風発、語り合う。

そこに加われるなら、おもしろそうだ。

事業報告

東海ジェンダー研究所20周年記念 国際講演会2017

アメリカにおける女性・フェミニズム・ジェンダー研究

講演者 スタンフォード大学歴史学科教授
エステル・フリードマンさん

通　訳 野崎 由紀さん

本研究所の20周年記念講演会は、その任に最適と誰もが納得するスタンフォード大学のフリードマン教授をお招きして、10月21日（土）午後に開催されました。会場は、雨天にもかかわらず100名を超える参加者で埋め尽くされました。講演タイトルの副題は「40年の研究生活をふりかえって」ですが、この40年間にわたる長い女性研究 ― 学究生活のイメージでは捉えきれない情熱あふれる闘いに満ちた人生 ― の出発点は、実はこの名古屋にあったのです。先生は、コロンビア大学の学部学生であった1968年夏に国際インターンシップ制度を利用して3か月間名古屋のホテルに勤務され、当時の日本女性の生き様を身近に見聞きし、その体験が女性研究に生涯を賭ける契機となったと切り出されました。そこで会場との距離は一気に縮まり、人々は熱心に講演に聞き入ることになりました。

講演は4部構成で進められました。第I部「プロローグ：「女性」を主題として」に続く第II部「1970年代と80年代の連帯と教育機関の形成」では、窮屈で性差別的な東海岸の名門校の職を捨て、ユダヤ人でレズビアンであった先生はより開放的な西海岸のスタンフォード大学に歴史学科二人目の女性教員として移ったこともお話になりました。ここでフェミニズム研究の確立に邁進されましたが、学位授与専門分野としてこれを確立するのに10年も要しました。ハイライトは第III部「1980年代と90年代の危機と反動」です。東海岸に比べれば、ずっとリベラルなスタンフォード大学においても、彼女に終身在職権を与えるかどうかは大問題となりました。歴史学科の承認にもかかわらず学部長はこれを拒絶し、それを機に大きな闘いが始まったのです。1980年代初めに先生は終身在職権を求める訴訟を決意して立ち上がり、これは全米のフェミニストが支援する象徴的事件となりました。

さらに感動的であったのが第IV部「回復（resilience）：1990年代から現代まで」です。全米が見守る中、先生はついに終身在職権を獲得し、フェミニズム研究は博士課程までもつ正規の学問として確立し、2007年には女性研究課程は全米で800を超えるまでになりました。フリードマン先生の人生は、女性研究、フェミニズム研究、ジェンダー研究、セクシュアリティ研究の歩みを体現しており、1990年代から現代に向かって目覚ましい回復期、そしてさらなる新分野へと拡大しています。それらの学問は幾度となく死を宣告されるような危機に立たされ、その都度素晴らしい回復を見せてきました。そして、今アメリカの女性研究はトランプ政権下で、再び困難に直面しています。

濃密な講演内容の詳細は後日、冊子にまとめてお目にかける予定です。また、最後に触れられた「トランプ政権下でフェミニストとして生きること」は、別の機会を設けてお話を伺うことになりました。日本語の復習もなさって来日されたというフリードマン先生のお話は、先生の真摯な研究姿勢と共に女性学の不屈の歩みを明らかにし、常にリジリエンスを期する力強いものでした。

（三重大学名誉教授　小川 眞里子）

10月23日（月）に当研究所のセミナー室に
フリードマンさんをお迎えして、
ランチセッションを行いました。

アンケートから

先生の情熱に感動しました。どの国でも、どの市町でも、同じ道をたどっているのですね。

とても興味深かった。スタンフォード大でもテニアの資格を獲得するために裁判までしていたとは！
また、LGBT、クィア理論についても、積極的にフェミニズムをとり入れる姿勢にも、感銘を受けた。

実体験に基づいたフェミニズムもよくわかりました。今、反動的な政権のもと、女性の意識変革などが求められていると思います。有意義な講演だったと思います。

個人助成受託者報告会

7月8日（土）午後、東海ジェンダー研究所セミナー室で、個人助成受託者からの研究成果の報告会が開かれた。報告者は4名、それぞれジェンダー視座からのユニークで力のこもった報告であった。

第1報告の西山真司「政治的な経験における『女性であること』の構成―エスノメソドロジーを用いたジェンダー政治学の可能性」は、福祉事務をになう行政サービスの日常的やりとりのなかにおけるジェンダー規範のありようを、エスノメソドロジーという手法で分析するという意欲的な研究であった。研究はまだはじまったばかりだが、ジェンダー研究の新たな地平を切り開くことを予感させる報告であった。

第2報告の江口佳子「ブラジル軍時政権下の女性作家による女性の自己表出」は、1964年から1985年までのブラジル軍時政権期、フェミニズムの影響を受けた女性作家の文学の興隆を取りあげ、これまで排除され無視されてきた女性の声を認識し、再構築し、女性の主体性を獲得する、新たな女性文学の流れを明らかにしようとする意欲的な報告であった。

第3報告の久島桃代「農村に移住する女性たちの地域社会―ジェンダーの視点から」は、福島県昭和村での「カラムシ」というイラクサ科の植物繊維を材料にした織物を織る「織姫」として都会から移住してきた女性たちのジェンダー化された「移住経験」についての調査研究である。これらの「織姫」たちは、村の行政当局による「地域おこしの労働者として」「嫁として」の期待に縛られながら、それとはちがった「柔らかな諦観のもとで」「自分たちの疑似家族」を構築している状況が報告された。研究の素材も観点も興味深いものであったが、こうした女性たちがなぜ「疑似家族」を構築していくのか、そこのところの社会学的な整理がなされればより興味深い研究になったと思われる。

第4報告の佐藤美和「日本における同性カップルに対する権利保障の法制化にむけた現状と課題」と題する報告は、東京の渋谷区や世田谷区、伊賀市（三重県）や宝塚市（兵庫県）、那覇市（沖縄県）、札幌市（北海道）などの自治体で、同性パートナーシップを認め、自治体が経営する公営の住宅や医療機関の利用に、パートナーシップとして便宜をはかる制度を調査したものである。こうした現状を人権の問題としてどう深めていくのか。今後の研究が待たれるところである。

いずれの報告も、ジェンダー研究の新たな地平が切り開かれるのを予感させるものであった。

安川 悦子（東海ジェンダー研究所理事）

2017年度　研究助成受託者の決定

	氏名・団体名	テーマ
個人助成：6名（応募者22名）	本山　央子	在日米軍による性暴力の実態および刑事司法処理に関する調査
	加野　　泉	子育てにおけるジェンダー役割の再構築 ―アメリカ「ヘッドスタート」の家族規範の検討をもとに―
	Turmunkh Odontuya（トゥルムンフ・オドントヤ）	ポスト社会主義モンゴルにおける「理想女性」のイメージ ―婦人誌「Mongoljingoo」誌に掲載された写真や記事を分析して―
	水澤　純人	現代パキスタンの市民社会とジェンダー ―イスラーム団体の言説の検証を中心に―
	柴田　里彩	戦後における公立女子高校の成立過程に関する考察 ～地域の特性に応じた女子教育という視点から～
	目黒　　茜	「産む身体」の歴史社会学的考察 ―1920～1930年代の医療的啓蒙言説に注目して―
団体助成：1団体（応募数2）	リプロダクティブ・ライツについて考える会	妊娠相談制度の法的整備に関する研究 ―女性のリプロダクティブ・ライツの観点から―

INFORMATION

お知らせ

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（ＧＲＬ）開館

3年余りにわたり東海ジェンダー研究所と名古屋大学が連携して準備をすすめてきた「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）」が、2017年10月31日（火）開館記念式典を行い、11月1日（水）から、皆さまにご利用いただけるようになりました。

GRLは、広く国内外に開かれた施設で、開館時には女性・フェミニズム・ジェンダー問題に関する図書約12,000冊、雑誌、資料（アーカイブ）などが閲覧できます。

ジェンダー研究の第一人者である水田珠枝氏（当研究所顧問・名古屋経済大学名誉教授）の貴重な蔵書を始め当研究所にゆかりのある方々から寄贈いただいた和書・洋書・資料や当研究所が所蔵していた図書・雑誌・資料など約20,000冊（一部、整理中）を当研究所から名古屋大学に寄贈し、GRLがスタートしました。

GRLは、ジェンダー研究の推進、国内外のネットワークの拠点としての活動をすすめる一方、ジェンダー問題に関心のある方であればどなたでもご利用できます。カフェも併設されています。

また、今後、ジェンダー問題に関する講演会、研究会なども行われる予定ですので、詳しくはGRLのホームページでご確認ください。

開館時間等は、次のとおりです。

開館　火曜～土曜：10:00～17:00（金曜 10:00～20:00）
閉館　日曜・月曜・祝日・年末年始
URL　www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp

外観

図書館

2017年度　賛助会員のつどい（公開）

日時　2018年1月27日（土）午後
講師　国立女性教育会館（NWEC）客員研究員 青木玲子さん
会場　名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）
　　2F レクチャールーム

どなたでもお申込みいただけます。
詳細は決まり次第、チラシ、HPなどでお知らせいたします。

賛助会員を募集しています。

賛助会費　年間　一口　1,000円
振込先　郵便振替口座　00820-0-77338
公益財団法人東海ジェンダー研究所

＊会員の皆様には当研究所の年報『ジェンダー研究』やニューズレター『LIBRA』、講演会などの事業のご案内をお送りします。
＊当研究所は公益財団法人の認定を受けており、会費及び寄付については税法上の優遇措置があります。

編集後記

10月21日に東海ジェンダー研究所20周年記念事業を無事終えることができました。

スタンフォード大学のエステル・フリードマン先生の講演には、思いのほか多くの皆様からお申込みをいただき、20年の重みを改めて感じました。

また、11月1日には、当研究所が収集・寄贈した図書等により、永年の懸案であったジェンダー研究をすすめる拠点GRLが名古屋大学に開館しました。

これからも性別にとらわれることなく生きることができる社会の実現に向け、当研究所は着実に研究活動や事業をすすめていきたいと思います。

皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

LIBRA
公益財団法人　東海ジェンダー研究所
〒460-0022　名古屋市中区金山1-9-19　ミズノビル6F
ＴＥＬ　052-324-6591　ＦＡＸ　052-324-6592
E-mail　info@libra.or.jp　http://www.libra.or.jp/